

盛久の周辺 (一)

竹本幹夫

従来、能「盛久」の典拠は長門本平家物語（以下「長門本」と略称）巻二十所収の盛久説話であると考えられていた。この説話は長門本の中で盛久助命ばなしに付会した新造観音利生譚に脚色され、平家の侍が赦免された唯一の例外的事件として、独立性の強い特異な内容を有している。盛久の説話は、現在までのところ長門本以外にはその存在が確認されておらず、それが能「盛久」の典拠に長門本の記事が擬せられた最大の理由である。

盛久に関する説話は実は他にもいくつかある。そのうち肥前島原松平文庫蔵『平家物語秘伝書』所収の「盛久之事」は、長門本の本文と重ね合せることにより、この能の典拠を考える上での恰好の資料になるかと思われる。能の分野では未紹介の資料なので、松平文庫の許可を得て、一応以下に報告したい。紙数の都合上、説話自体の考察は次回に譲る。

該本は、うす茶色表紙・袋綴の大本（267×203mm）で、『平家物語秘伝書』と題名のある、平家物語の任意の巻からの、秘伝部分を中心とした抄写本である。料紙は楮紙、片面10行の漢字交り片仮名書き（節付ナシ）。奥書は

ないが、本文末に△尚舎源忠房▽△文庫▽の印が押捺され、江戸初期から中期頃の間、初代島原藩主松平忠房のもとで書写されたことがわかる。墨付30丁のうち冒頭に目録1丁があり、各段名の下に巻数がしるされる。

①△三拾三間供養之事一巻▽

②△宗論之事十巻▽ 流沙葱嶺・宗論・高野御幸(一)・同じく(二)・高野山再興

③△鏡劍之卷事十一巻▽ 内侍所奉迎・冷泉帝と神靈の奇瑞・つるぎの巻

④△備前守行家被誅之事十二巻▽

⑤(法性寺合戦之事)知忠・忠房・宗実・盛嗣

⑥△盛久之事十二巻▽

構成は以上六章段で、目録にはない⑤をのぞき、段毎に改丁、内題を朱で小書する。全体を通じ記述はやや簡略だが、記事の内容・構成に独自の増補のみられることもあり、これらは抄写の際の作為ではなさそうである。

①～⑥までの各段を備える本は、平家諸本中長門本だけだが、長門本が二十巻からなるのに対し、該本の原本は十二巻仕立てであったらしいこと、⑤と⑥の順序が長門本の配列と逆であること等不審が多く、必ずしも現存

長門本からの抄録とはいいがたい。各段の本文は厳密には系統不明とせざるを得ない。たとえば、増補系らしきもの(①)、部分的に屋代本や鎌倉本、或は平家正節に近い本文を持つもの(②)、覚一本系の本文に酷似するもの(③)、南都本ときわめて近い異文関係にあるらしいもの(④⑤)などだ。⑥の「盛久之事」は長門本以外とは比較の仕様もないが、両者をくらべるかぎり、話の筋立て迄も異にする、校合不可能の異文である。かかるぬえの本文の性格付けについては後考にまつこととし、ここは「盛久之事」の本文を掲出するとどめておこう。掲出にあたり諸段落・鈎印・句読印・濁点等を施し漢字は通行の字体に改めた。

### 盛久之事

檀浦ニテ生捕ラレシ廿四人ノ侍ノ中、主馬判官盛久ハ入道相國ノ近親ニテ武勇ノ聞エ有シカバ、殊ニ大事ノ囚人ニテ、土屋三郎宗遠ニ預ケラレ近キ比ニ可レ被レ誅ヨシ聞ユ。(A)

此ノ盛久ハ、若年ノ昔シヨリ老年ノ今ニ至ルマデ清水寺ノ観音ヲ信ジ、毎月十八日ニ参詣シ、普門品卅三卷奉レ誦誦、現当二世ヲ祈リケル。其外毎日二十八卷、亦観音ノ名号一千返急ル事ナシ。殊ニ近日可レ被レ誅由聞ケレバ、多念ナクコソ見エニケレ (B)

カ、リケル所、明日巳ニ最後ト聞エケル前ノ夜、頼朝不思議ノ靈夢ヲ蒙リ玉フ。年比八

十計ノ御僧、香染ノ衣、同色ノ伽梨衣ヲ肩カケ、水晶ノ珠数ヲ爪グリ、鳩ノ杖ニスガリ、マコトニ貴キ御姿ニテ出来タマヒケリ。御夢ノ心ニ「観世音ノ御影向有ケル」ト難レ有思食テ、掌ヲ合セ奉レ、拜玉ヒケレバ、彼御僧ケダカキ御声ニテ、「平家ノ囚人主馬判官盛久ガ一命ヲ、此僧ニマゲテ助サセ玉ヘ。其ヤウ申サン為ニ、洛陽東山ノ辺ヨリ是マデ参リ候」ト有リケレバ、「畏テ承リ候」ト許諾アルト御覽アリテ、御夢ハ則醒ニケリ。(C)

アマリニ不思議ニ思食、夙ニ起玉ヒテ、雑色時沢ヲ召テ、「土屋三郎ガ許エ参リ、囚人主馬判官盛久、無ニ左右ニ不レ可レ誅。急デ是エ具シテ参レ」ト仰セケレバ、時沢承リ土屋ガ館エ急ギケル。(D)

土屋ハ是ヨリ先立テ、盛久ヲ輿ニノセ由比濱ニ起キ、早ヤ敷皮布カセ引居タリ。其時盛久、土屋ニ向テ云ケルハ、「此間ノ御芳志カヘスノモ難レ報ジ。トテモノ御情ニ、年来奉ニ信仰ニ御経一卷奉レ誦誦、最後に勤メネンゴロニシテ可レ被レ誅」由望ミシカバ、土屋モ是ヲ感ジ、片時ノ刻限ヲ相待ケリ。(E)

雑色時沢ハ、「スハ、盛久ハ討レケルヤ」ト大ニアハテ、鞭ニ鐙ヲ合テ飛ガ如ク馳ケルガ、御経モ誦果、太刀取後ニマハリケル所エ馳付テ、「ヤア如何ニ。アヤマリ玉フナ土屋殿。盛久ハ御捨免候ゾ」ト高声ニヨバワリケ

ル。盛久モ夢ノ心地シテ、只忙然トシテ坐シタリケル。土屋モ大キニヨロコビテ、頓テ馬ニ打ノセ、鎌倉殿エツレテ参ル。(F)

頼朝御対面アリテ、「如何ニ。盛久ハ多年

清水ノ観世音ヲ奉ニ信仰一カ。」「サン候」ト

申ス。「此暁不思議ノ夢想ヤ有ル。サモアラ

バ其ヤウヲ語り申セ」ト仰セケレバ、盛久キ

イノ思ヲナシ、先ノ夜ミツル夢ノヤウヲ鎌倉

殿ノ御覽ジケルニ少モタガヒ無ク語り申シケ

レバ、当座ニ有ケル大名小名共、皆一同ニ感

ジケル声、シバシハ静マラザリケル。頼朝モ

奇特ニ思食、「マコト観世音ノ御所望ニヨ

リ、一命ヲ助ル所也。信心ノ程コソ羨ケレ」

仰ケリ。是ヲ見聞人々、盛久ヲウラヤマヌ者

ハナシ。(G)

盛久不思議命助カルノミナラズ、再三ノ御

感ニ預リ懸命ノ地ニ安堵スルコト、偏ニ清水

ノ観音ノ御利生ト聞エシ。(H)

◇「研究・十二月往来」は昨年六月、本誌二二三号から連載をはじめました。今までの掲載目録は次のとおりです。

223号①「七夕」雑考 西野 春雄

225号②近世戯謡考(一)「五尺手拭」その一 堀口 康生

226号③ // (二)

230号④申ハカリナク候 // おもてあ、ぎら

231号⑤廢曲ハ武王Vの作者

232号⑥実盛奇蹟の正体

233号⑦もう一つの八読ミ物V

234号⑧「大江山」雑感

235号⑨水無月祓の物着

236号⑩禪竹の能―芭蕉に寄せて―

右のバックサンハ「こゝさいます

片桐 登

中村 格

西野 春雄

徳江 元正

池田 広司

西野 春雄